

子母澤寬

勝海舟
第四卷

大政奉還

新潮社版

勝海舟 第四卷・大政奉還

昭和四十年四月三日印刷

昭和四十年四月八日発行

著者 子母澤 寛

発行者 佐藤 亮一

印刷所 三晃印刷株式会社

製本 新宿加藤製本所

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(260)一一一一(代)

振替東京八〇八番

定価四三〇円

乱丁本はお取りかえいたします

勝

海

舟

第四卷・大政奉還

時 雨 月

船が、半分沈みかけ、尾をひきずるようにして、高砂の加古川尻の浅瀬へ乗上げて行つたのは、それから一刻半ばかりの後だ。

勝はぬれ鼠で髪もさんばらになっている。船頭たちも、素裸で、とにかく命を完うして大地を踏んだ時は、流石に生きている人間のようなでなかつた。孝五郎は眞額を少し怪我した。

「殿様は偉いお方だ。本当に殿様がいなかったら、この船あ地獄へ行つていやした」

と、水夫達は代る代る、殿様があの巨浪を泳ぐような中を機関と甲板の間を稲妻のように駆け廻った働きは只事じやあねえ、人間業じゃあござんせんね、と本気で勝の前でそんな事を云っている時には、勝はもう、難船ありと知って海へ集まつた人々につれられて、

「船の段取をつけたら、みんなも、おいらんところへやつて来い」

そう云い残して、小さな飯盛旅籠へやつて行つた。

海が浅くて大きな船は入れないが、高砂は昔から名代の船着だ。古来、水夫も船頭も沢山出ているし、大阪の角倉玄之の渡海船の書役に雇われて、僅か十五で、呂宋から暹羅まで行つた天竺徳兵衛もこの出である。

自然、その船乗衆を對手の首の白い女達がうようよしての中に、勝は平気で胡坐をかいて、みんな来たら、うんと酒を飲ませて、お前ら、根限りとりもちをしてやつて呉れろ、おいらにあ直ぐに飯を持って来い、ここあ昔朝廷へ御魚を奉つたという魚のうめえで知れたところだ、馳走をしろよ。そう云つたと思つたら、そこへごろりと寝て終つた。

僅かの間だが、そのまま、正体も無く眠つたらしい。眼をさますと、見世の方の部屋でわいわい云つて、みんなの酒を飲んでいる声がしている。

「おいおい、おやじを呼べよ」

通りかかった女が、旅籠の亭主をつれて来た。どうせこんな渡世の奴だ、土地の無頼の親分ででもあろう、でつぶりとした毛虫眉の男である。

「松右衛門というものの墓あるだろう、寺あ何処だ」

「おや、殿様は松右衛門さんの事を御承知でいらつしやいやすか」

「ああ知つてるよ。とんだ事でここの浜へ上つたのも何か

の縁だ、日頃思っていた事が、ほんに果せるといふものだ、寺へ案内して貰いてえが」

「へえ、宜しゅうございます」

ところで——と勝は、金の包みを、そこへ出した。

「あ奴らに、腰の抜ける程飲ませてやれ、この金が残ったら女らへ祝儀。足りねえなら、いつでもたよりをしろ、おいら、江戸元氷川の勝麟太郎といふもんだ、すぐに金を飛脚にするよ」

どさりと置いた包金、船頭達が十日や二十日、浴びる程に飲んだとて足りないどころの騒ぎではないだろう。

「が、船頭は、おいらを何処の馬の骨か知らねえのだ、名前^な前は云うな」

*

勝のたずねる松右衛門の墓は、村の西はずれの十輪寺にあった。宝瓶^{ひょうびん}山と号し、弘法大師の宝瓶の影画と五仏尊像一幅を所蔵し名だたるお寺だった。尊像幅は現在国宝である。

亭主も、勝麟太郎の何者であるかは知らないだろう。がそのお金の出しつぷりに胆をぬかれて、丁寧に案内をした。

松右衛門の墓は立派だ。坊さんへ頼んで供養の経をあげて、勝は珍らしく神妙に合掌した。

松右衛門は、一介の船頭だった。が、天明、寛政の頃、實際航海をして、従来の帆木綿の組織の不備を痛感し、これを堅固な広幅物に改めた。これ迄の帆は木綿を二枚或は

三枚重ね、三幅つなぎ合せて一反としたもので、松右衛門以来、日本の布帆ががらりと一変したのである。これだけでも、松右衛門は日本船乗りの恩人だ。ましてその後、この高砂に、自力で舟溜^{ふなづみ}を持えて、往來の船にどれだけの便利を与えたか知れない。

「船乗りばかりじゃねえ、高砂の者あ、この人を忘れちゃ罰^{ばち}が当るね」

そう云って、やがて道すがら、北本町にあるという徳兵衛の墓へも詣ろうとしたが、ふと思い返して、小急ぎに旅籠へ戻って、孝五郎へ後の事を細々と云い残し、金も与え、芸州の辻将曹と、植田乙次郎への手紙を渡し、自分は早駕を用意させて、早々に明石へ出発して終った。さつき迄の様子では一日二日はここに滞在するようでもあったが――。

殿様出発と知って、旅籠の前へ見送った船頭や水夫は、すっかり酔っぱらって、泣くもあり、笑うもあり、しかしみんな揃って、からだが二つに折れる程にお辞儀をした。

江戸へ来たらきつとお寄り、赤坂元氷川へ来て、勝ときけあ、多分知れるだろう、え、勝だよ、勝はそう云い残し

た。

風はまだある。海を受けた播磨路を、明石の城下までは五里余の道。時々さらさらと木の葉が鳴って、街道の松の並木に、のしかかるように青い淡路の島が見える。

高砂の飯盛旅籠で、ほんの一寸の間でも、とにかく眠りはしたが、宮島以来、気はつかないが、ひどく疲れている様子だ。駕の中で時々正体もなくなつて終う。

勝は、京で、慶喜公に云つて来た。——不肖ながら、一月を出でず、必らずこの始末をつけて帰ります、若し一月を過ごしてなお且つ麟太郎が帰りませんでしたならば、身首、処を異に致したと御恩召を賜り度く——と。その京を出て広島へ下つてこの方今日まで、未だ二十日に足らず、まだ日はあるが、天下の御為め、勝の京への帰心は矢のようであつた。

神戸の生島四郎太夫へも寄りたい。大阪にも寄りたいところがつたとある。しかし其処も此処も素通りに、淀からは舟、やつと京へ入つたのは十日の四つ半頃であつた。

京の山々には秋が来ていた。

その夕ぐれ近い頃であつた。

日がかげると共に、俄かに涼しさが、何処からともなくにじみ出て来る。

首尾よく天下至難の大任を果たし、今頃は城中で、挙げ

て感謝されていなければならぬ筈の勝は、たった一人、何にもむつとした顔つきで、例の古宮川町の小饅頭屋亀屋の茶染めの小さな暖簾をくぐつて、店の土間へ入つて来た。

片隅にふつくりと築いた蒸釜が薄光りしている。

*

「まあ、先生」

お神さんが、如何にもびつくりした声であつた。

「宿無しだよ、すまねえが世話になりてえがねえ」

お神が笑い顔で頻りにうなずきながら奥の方へ、お前さんや、勝先生だよ、と呼んだ。亭主は何やら洗い仕事でもしていたらしく、それをほったらかして手を拭きながらあわてて出て来た。

裏がすぐに加茂の川原、前が東山、八坂の塔も手に取るように見えるこの小饅頭屋の二階には勝は、長崎の梶のお久さんと、ずいぶん長いこと世話になった。

あの時分は坂本竜馬だの、長崎で同志に詰腹を切らされた近藤長次郎だの、人斬りの岡田以蔵だの、紀州で親の敵討をした広井磐之助だの多勢が出たり入ったりして——。

お神さんが二階を片づける間、亭主と二人、店先で茶を飲んで、そこにある蒸したての小饅頭を食べながら、実あ御用で芸州へ行って今日けえって来たんだが、旅館位は定

めておいて貰える寸法だったに、旅館どころか鼻も引っかけて貰えねえのさ、鴉だつて時がある、人間の宿無しあ困るものねえ——。日頃は無沙汰で、困る時ばかりやって来ちゃあ済まねえが、勘弁おしよ。

丁度この時、足ばやに表を通りかけたものがある。雪駄の裏金が、ちらちらとしたりが、一度行き過ぎようとして、ふと立停ったと思つたら、いきなり、さあつと土間へ入込んで来た。立派な服装で、家来を一人つれてゐる。家来は、吃驚して、往来へ突立つたままだ。

「先生！」

勝は真向きに相手の顔を見て、
「どうしたよ」

と云つた。珍らしや、佐藤与之助である。

「お前、まだ大阪かえ」

「はあ」

与之助は、それつきりでいつ迄も次の言葉が出ない。それから暫くは、勝も黙っていた。

「先生は広島だと承つて居りましたが」

与之助がやつと云つた。

「室浜の牡蠣じゃあねえよ、いつ迄あすこにへばりついちゃいねえや」

亀屋の亭主も与之助も、思はずぶつとふき出して、与之

助は、ちよいと黙礼して往来へ出ると、家来を先きにやつて終つて、今度は、改めたように落着いて店の傍らへ腰を下ろした。

「相変らず御鉄砲方かえ」

「はあ、この夏から御鉄砲奉行並になりました」

「田町この方、海軍を学び、海軍塾の塾頭はしても、海のこととはとんと空つただが、鉄砲はお前にや、いっち得意なところだ、御役を大切におし」

有難うございます、それにしても先生の今頃こうしたところに悠々としていられるのが腑に落ちませんが、一体どうなされたのでございますか、と与之助は低い声でいつた。

「また嫌われたのよ」

勝がそう云つた時、お神さんが、すっかり二階の仕度が出来ました、と知らせる。亭主が立ち上つて、店の八間へ灯を入れた。

勝は、すぐに二階へ上つて行つた。与之助も黙つてつて行つた。

行燈がついて、窓が開いている。お久さんがよくこの窓に立つて京の川原を見ていたものだ。勝は、そこへ行つて窓へ右手で頬杖をついて川原越しに、ちらちらと灯の入つた五条大橋から、寺町、木屋町辺りを、思出深そうに、じ

つと見てゐる。

*

与之助は坐つて、わたくしは今早朝御用があつて大阪から出て来たのですが、あちらはいやもう長州の事では大層な風評で、小笠原吉岐守様一行が小倉を退散した時などは誠に聞くも醜態、その朝、肥州藩のものを呼出してあつたところ、それがまだ来ない中に、富士艦から迎へが来たので、そつちはそのままほつたらかして、大狼狽に乘艦し、長崎へ出帆して終つた、しかも周囲にいて日頃大きな事を云つていた人達などは、これより先き早くも荷物を送り出し家来もやつて旅宿まで奔走させてあつて、富士艦が着かない前に、もう西福寺その他旅館の仕度が整つていた。戦さの前に、すでに没落を知つて、窃かに逃仕度がしてあつた、それを大阪へかえつてからは、頻りに弁解して、自分らの非を掩おうとしているので心ある人々は何れも憤慨甚だしいと云う。

勝は、振返つて、

「今あな、そう云う世の中だ、世の末というものは、みんな、こんなものなんだ。吉岐守様ばかりじゃあねえ、もう一と月もこのままに置いて見ろ、出征の諸藩兵は幕府の命などを待つどころか、みんなどんどん国へけえつて終うだろう。ふところが空つ尻で、手も足も出ねえのだ。この明

明照々が、幕府の奴らにはわからねえのだから、与之助、これあまあ一体どうするえ」

云いながら、与之助の前へごろりと横になつて、

「兎戯に類した無名の戦さに、みんな一年余りも滞陣している。しかも兵は弱いし、諸将も命に従わない。今に幕府がなんとかうめえ智慧を絞ってくれるだろうと、首を長くして待っているが、智慧どころか、馬鹿ばかりだからねえ。ふん、笑わせるよ、この日本国大變の秋に幕府の恥も外聞もあるもんか」

暫く眼をつぶつていた。

遠くで笛を吹いてる奴がある。涼しくはなつたが、まだ川原には人が出ているのだから。

「おいら話を纏めてけえつて来て、すぐに登城してな、応接の顛末を報告しようとしたんだ」

「は」

「ところが、だあれもそれを聴こうとしねえのだ。ふん、聴かねえどころか、みんなそつぽを向いたり、お前は何処の奴だというような、面あしてな、早く退れと云わぬばかりよ」

え？ 与之助は眼を丸くした。

「そんな馬鹿な話が——」

「ある、あるんだから面白いだろう。おいらね、自惚れて

いてな、すっかり背負い込んでいたものだから、おいらが帰えったら、みんな喜んで、すぐにも一橋公にも逢えるんだと思つてた。が、逢うどころか、今夜泊る旅館一つ定めて、おいちゃあ呉れねえのさ。なんの為に、誰に頼まれて、わざわざ広島くんだり迄行つたえ。けえつて来て、宿無しの野良犬見てえになるためじゃあねえんだよ」

はあ。与之助の頬は真つ蒼になった。唇がびくびく動いて、この人が、こんなに腹を立てた表情はこれ迄に見なかつた。

*

勝は、俄かに、少し調子のはずれた程の大きな声で笑ひ出した。

「幕府は死に急ぎをしているのよ。只、その道連れに、万民塗炭の苦しみは真つ平だからねえ」

そう云つたと思つたら、今度は、まるで別人のように、
「竜馬からたよりあねえか」

はあ、ありました。与之助は、ぶつりとそうは答えたが心の中はそれどころではない。後をつづけなかった。

「近頃あ何処にいるえ」

「^{下関}の伊藤丸三という人のところにいるようです」

「お竜とかいったあの女あどうした」

「大いに可愛がつっているようです」

「ふむ、大いにか、大いにあよかったねえ」
勝はまた調子はずれの声で笑つた。

与之助は、なにかしら氣になつて、その晩とうとう、此処へ泊つたが、二人とも珍らしく黙っている時の方が多かつた。夜更けて千鳥の声をきいた。

「おいら、また御役を御免蒙つて江戸へけるよ」

眠られないのか、真夜中に寢返りを打つた勝が、与之助も眠られずにいると知つて、こんな事をいつたが、それつきりで、もう与之助がなんといつても返事をしなかつた。

幕府もほんとになつちやあいない。一橋公も、勝に勅命だなんだとああ云つて、わざわざ広島へやつていながら、そうなつてもまだ本腰が定まらなかつたのだらう、なんでも彼でも自分の方の面目だけを立てようという。勝が本気で応接ははじめているのに、別に、勅書を仰いで急使を出した工作がもつて来ると勝の応接は誠に妙なことになる、ちよつと余計な事をしているような風になつて終つた。従つて、勝なんぞは、もう、どうなつてもいいのである。

次の一日、勝は、亀屋の二階で寢て暮した。

与之助も、とうとう何処へも行かず、勝の傍にいた。与之助が、竜馬から来た手紙の中にお竜の事がこう書いてありました。日々申聞けるには、竜馬は御国の為めに骨身を

碎く人間である、だからこの竜馬をいたわり呉れるのが取りも直さず国家の御為めで、お前は決して天下の国家の云うことは要らぬと教えている、誠に妙な女だが、自分の云う事はよく聞き、縫物や張物の隙には、自分の襟のぬい取り、またその隙には本もよむようにしている、又、白刃を恐るる事を知らぬ者にて、別に力みはせねど、又一向に平生と変りしこともなしというのがありました。例の伏見の寺田屋で、襲撃された時の事を申すのでありましょう、という。

勝は、この時は、うれしそうににこにこして、

「似たもの夫婦だねえ」

といっていた。

夕方から小雨になった。雨が降ると、ひどくつめたかった。京は一雨毎に秋が色づいて来る。

*

次の朝、勝が城へ出て行くのと一緒に、与之助も用を済ませて大阪へ帰ることにした。御役があるから、やっぱり、何時まで此処にもいられない。

雨は止んで、比叡の上に白い雲がじつとしていた。

「江戸へけるから当分逢えねえだろう。おいらなあつと助、一生の間に今日程口惜しい事あねえんだよ」

「はあ、お察しいたします」

「察する？ ふむ、お前なんぞにわかるものか。おいら、一橋公や幕閣に煮湯を吞まされたなんざあ屁とも思つてやしねえんだ。幕閣なんざあ喧嘩相手にもならねえ奴らだよ。只なあ、ああいう勅書を奏請して持つて行かれたんじやあ、長州の広沢だの井上だの御堀だの、あの人達をおいらが売った事になるんだ、あの人達あ勝を信じて引揚げる幕軍を、只の一人も尾撃しやしねえじゃねえか。そこへ、やれ——暫時兵事見合せ——だの——侵掠の地早々引払——だのと云われちゃあ、おいらの立場あどうなるえ、勝麟太郎という男一匹の信がどうして立つ。人間はな、命よりあ信が大切だ。おいらはそれが口惜しくてならねえのだ」

——昨日からはじめてだ。勝の眼がまた今にもこぼれそうに、一ばいにうるんでいた。

与之助には、慰める術もない。なんだか黒いものに包まれた気持で、これという言葉もなく勝と別れて行った。うしろから勝は四辺かまわぬ大声で、

「おい、御役を大切にしろ、御鉄砲奉行並現米八十石はお前さんには有難すぎるぞ」

といった。通りがかりの人達は、みんな口を掩うて、ふき出すのを、隠くして、こそこそと駆けぬけていった。

勝は登城したものの、みんな、なんだか、じろじろ自分を見るだけで、碌に口も利かない。勝に対する風向が妙

だ、うっかり親しく口を利いたりしているところを、誰かに見られて、どんな飛つちりを喰わないものでもない、とばつちりは来なくても疑われちゃあ大変だ、そんなものが余りありありと見えるので、勝は次第におかしくなって、おしまいには向うから人が来ると、こっちでそつぽを向いては歩いた。尤も、こうした空気の中に身を置くことは勝はいささか馴れつこだから。

この日も誰一人、勝を呼んで、長州^{たんぽん}応援の顚末を聴こうというものがない。老中は板倉伊賀守勝^{かつき}静が出ているが、勝出仕と言上しても逢おうとは云わない。

勝は腰は低いがにやにやして大目付川勝美作守の詰所へ入って行った。去年の十一月から任についた愛宕下薬師小路にいる二千五百石の旗本だが、大阪にいる室賀伊予守と共に勝とはかねて知合だ。この人だっておれに余り親しく話かけられては困るだろう、勝はそう思ったのか、座につくとすぐ、ふところから、奉書を取出した。

「恐れながらお取次を願います」

川勝はちらりと見て、

「辞表ですな」

といった。

*

「そうでんす、勝は微力、当節の大任には当れない、この

辺がいいところでんしょう」

美作守の調子から、こ奴はそんなにおれに來られるのを閉口してはいないと感じたのだろう、いくらか打解けて、そう云って、ぐいと美作守の前へ押してやった。

「取次ぎましよう。しかし、勝さんともあるものが、この際黙って引込む手はないでしよう」

「ほほう、これあ驚いた。大目付衆^{だいかんまう}が、あべこべに勝へ油をかけやんすか」

「いやあ、あたしよりあ、大阪の伊州^{いちゅう}が油をかけるそうな、昨日、御用で出て来て即日かえりました」

「そうでんすか、あんにやあ逢いたかったが」

「ところで、どうです、長州の方もいろいろと面白くないようだが」

「そうでんすかねえ」

勝はそつぽを向いて、顚を撫でながら、にやにやしただけで、なんにも云わなかった。

「会津桑名は本日にも到るもお且つ主戦論で——」

「結構でんしょう、一度かいた恥あ、幾度上塗りをしても同じこと、幕府はまだまだ恥をかきたりないと見えるから」

勝は間もなく帰って行った。

美作守がその辞表を、板倉伊賀守へ差出したのは一刻は

かりの後。伊賀守は去年十月から周防守を改めたのだ。

「勝は下城したのか」

「はあ。左様で御座いましょう。お逢いなさるなら使を差しましようか」

伊賀守は少し考えていたが、

「いい、いい」

といった。流石に、内心穏かならぬものがあるのが、美作守にはよくわかる。

しかし、勝の辞表は、それっきりなんの沙汰もなかった。それから三日過ぎた。今日は小饅頭屋は、朝小暗い中から起きて、大そうな忙がしきだ。知合の若い女どもが三人も手伝に来て、猫の手も借りたいというのはこんな時の事をいうのか。

勝が、のっそり二階から下りて来て、なんだい、戦でもはじまるかえ。お神は、額に汗をにじませて、ほんに戦でございますよ、今夜は西陣のお問屋から大そうな御注文でございます。ほう、それじゃあ、おいらも手伝ってやるよ。まあまあ飛んだことでございます。お神さんはいい加減を云っているつもりだったのに、勝は、本当にやる気か、饅頭をふかす竈の前へしゃがんで、おいら火を焚くは上手だ、むかし火焚をしていたからな、そう云って、薪をくべ出した。

先生、いけませんよ、その火加減がまたなかなかむずかしく、やり損っては元も子も無くして終います、軍艦の釜とは違いますから――。ほう、じゃあ、教えておくれよ、なあに一度教われあ出来るだろう。

火を焚きながら、若い女どもにさんざ馬鹿をいってからかつて笑っている中に、その一日は過ぎて行つた。

一日とも云えず目に立って濃くなって来る京の秋の、画のようないい月が上つて来た。十五日の満月だ。水も澄み、大空も澄み今夜は勝の心もいくらかは穏やかだった。

*

西陣の問屋それがし方では、今夜その小饅頭を番頭丁稚出入のものに振舞つて、二た月おくれの月見をするのだという。八月の十五夜が当主の父の命日、九月の十五夜が母の命日。だから例年月見は十月にするのだそうなの。

そんな事をきくと、勝も妙に二階にじっとしていられなくなつて、ぶらりと外へ出て行つた。神無月の満月の青い光が京の街を、その光の流れへ浮び上らせているように見えた。

川原へ出て、一度五条の大橋を西へ渡りかけようとしたが、どうしたのか、そのまま真ッ真ぐ問屋町筋へ入って行つた。川や橋が、月の光を宿した姿も、ずいぶん美しいものであつたが、向い合つた問屋筋の大きな古い家が、一方

は月にくっきりと描き出され、一方は真つ暗く影になつて、往来もその屋根、軒に月をせかれて、墨を流したようになつてゐる上に、咳一つ聞えず、しーんとしているのが、勝には妙に氣に入つた。勝の雪駄の音が、一歩々々、はつきりと何処までも何処までも聞えるようでさえあつた。

大嫌いな犬が来る。勝は慄い上つて追つて、今度は少し逃げるように小急ぎに大仏の正面通りへ出て来ると、ここは、急にぼつと四辺が明るくなつて、大仏から妙法院、うしろに東山の峰々。右手は川を越えて七条新地。

勝は、ふと聴耳を立てて眉を寄せ、ちよつと立停つたが、そのまま大仏の耳塚の方へ行きかけた。

「お助け、お助け——」

今度は、これが、誰にもわかるように、はつきりと聞こえて、少し先きの誰やらの大きな屋敷の築土塀のうしろから、入り乱れた足音と共に、二つの人影がこつちへ向つて転がるように馳けて来る。

柳の木がある。垂れた枝が地へつくようになってゐる。

勝は、素早くその下へ身を避けて、避けながらひよいと見ると、二つの影を追つて、今度は三つの影が、獲物へ飛びつく格好だ、これは正に武家ぶけ、前のは、無腰なり、風熊なり、先ず、町人に相違ない。

悪いことに、前の影の一つが丁度、勝の隠れた柳のすぐ近くで、石にでもつまずいたか、地煙を立てるようになつて、大地へすべつた。一人は、五六間もそのまま走つたが物凄いい声をあげて、引返して、倒れた影を抱き起こそうとした時には、後からの三つの影は、もう、ぐるりとこの二人を取巻いて終つていた。

誰一人通らない。通つても、それと知つたら隠れるか逃げるか、近寄るものはないであらう。

近頃の京の巷では珍しくもないことだ。

「わからぬ奴だ、詫金を出せば許してやるというに」

一人が、それでも四辺をはばかりような少し皺がれた声で云つた。

勝が見ると、髪をうしろに総髪に撫でたいい加減な年の奴らしい。

*

へえ、へえ。その二人は互に抱き合うようにして、そう切れ切れに声を出した。父と子でもあろうか。

「貴様らあ、命より金が惜しいというのか。それなら、それでもいいのだ。おれらあ、なんでも詫金を出せたあ云わん。金がいやなら命を奪ふ迄の事なんだぞ。はつはつは。」

蛤御門以来、腕が鳴つてならんだ。十両や二十両よりあ、貴様らを膽なますにする方が面白いかも知れん」

今度は別な奴がそんな事をいった。いやに脂っこい憎態にくてまゝな言葉つきであった。

そんなこんなの中に、後の三人にまた一人加わった。これは年も若そうだったし、羽織を着て、風態もちゃんと整って、先ず相当な武家のような。黙って見ている。

町人は金を出した。そして泣声で、どうぞこれにて御許し下さいまし、と二人並んで手を合せた。

「なんだ、それならそれで早く出せあいんだ。貴様らあ、あわよくば一文も出さずに逃げよう、いよいよ切端詰つたら出そうと、得てして命より金を大切にする。俺達あな、二十両三十両、一夜の中に煙にして借しまん人間だぞ、な、貴様ら、これから先き長生きをしたかったら、金の出し惜しみをするな。まして往来で、武士に突当っておいで、そのまま逃げようなどとは飛んだ不心得な奴だ」

まあまあこれで命あ助けてやる、これを称して冥加金というんだ、二度とこうした時には手間暇をかけんようよく覚えて置け。

一時はどうなる事かと思つたが、騒が物凄かつた割に、話は簡単に片づいて、金を出した町人は、やがて、抱き合うようにしたまま、此処を去った。ずいぶん脅かされて逃げて来たものだろう、まるでふらふらして歩けなかった。

追剥、盗人である。まだ夜が更けたというでもない

に、こんな事をしかも鼻っ先きで見せられて、勝は、頭から水を浴びせられたようなものを感じた。

「二十両だよ、案外出しやがったな。どうだ金というものは、こうして取るもんだ」

総髪が、後から来た若い人のへそう云った。が、若い武家は、それには一と言も物を云わず、もう、とつと元来た方へ引返していた。

「おい、何処へ行くんだ。これから島原だ、お前の女あ首を長くしているだろう」

しかし、若い武家は、振返りもしなかった。

「おい、どうしたんだ、来いよ、来いよ」

一人が追いかけてようとした。この時他の一人が、偶然にも、すぐその柳の下に立っている勝の姿を見つけた。

やつ！そ奴の声と共に、勝は、三人の前へぬうーと出て来た。月が斜めに照って、勝の影は長く地へひいている。

*

「貴様あなんだ」

一人が脳天から出したような声でそう云った。勝は、じろりとそ奴を見ただけで、物も云わず、そのまま、ぶらりぶらりと歩き出した。いつもの、こうした時の姿で、両腕をだらりと下げていた。

いくらか遣える奴にはわかる筈である。おやじの小吉の

血をついで、それに島田虎之助の荒稽古でみっちり鍛えたからだだ。鉄砲玉が飛んで出ても驚かない度胸っ骨が、少し瘦せた小さなその五体には溢れているだろう。

悪事にもよる、下々の下の悪を働いた奴らは、流石に、胆が縮み上って終った。もう貴様あなんでも何もない、二度と言葉もかけず、刀も抜かず、一人が脱兎の如く駆出すと、他の二人もまるで踵で盆の窪を蹴飛ばすようにして逃げて行つた。

勝は笑う事も出来ない。虫唾の走るのを噛み殺すようにして、いつ迄もいつ迄も逃げて行く奴らの芋虫のようならしる姿を見ていた。

ひどく憂鬱そうに、小饅頭屋へ帰って来た時は、胸中むしやくしゃして堪らなかつたのだろう、すぐに二階で寝て終つた。

次の朝、いい小春日和。二階にすぎ透るような陽が当たると、勝は、一人で下へ降りて来て、裏へ出て、顔を洗つて、そのまま飯も済まさず、ぶいと出て行つた。羽織姿できちんとして少し反り身になると、やっぱり、何処から見ても、二千石の御軍艦奉行の貫禄だ。

その頃、会津侯御預の新選組は、壬生の屯所から、西本願寺へ移り、更に堀川通り東、木津屋橋の南に、本營を新築してここにいた。

近くに大きな不動堂があつて、俗に不動堂村といったところだ。

一町四方。堂々たる表門、左右の高塀、お長屋。玄関式台から長廊下の構え。御使者の間。役付諸隊士の溜々。隊士の宿舎、仲間小者の部屋、大勝手。宛然たる大名屋敷、それが木口も新しく、まだ近くへ行くとぶーんと木の香がしている。

勝は、玄関へ突立っていた。長州主戦論の会津藩の先手新選組へ、全く反対派の勝がのっそりやって来たのは考えて見ると、飛んだ大べら棒のようだ。

「勝麟太郎だ。近藤さんに逢い度くてやって来た」
取次の若い侍は、思わず、眼玉をきよろつかせて、ははつと、頭をすりつけるようにした。

「暫く御待ちをいただきとう存じます」

低い声で早口にそれだけいうと、あわてて奥へ引込んで行つたが、やがて、そこへ出て来たのは、副長土方歳三だ。髪の毛の濃い役者のような面つきで、向うが黙つていても、勝はすぐそれを知つた。

土方は名乗つて、鄭重な態度で、奥へ招じた。入つてすぐの突当りの廊下に、もう近藤勇が出迎えて、びったり坐つて、両手をつかえていた。無言である。

「やあ、これは、恐縮々々」